「う…」

リタ・スナップハンスは目を覚ます。
行方不明となった先輩、セリカをインフェスターの巣の内部で発見し
安心したのもつかの間。

リタはその姿に言いようのない違和感を覚え、疑問を投げかけようとし…
その後は気付いたらこの状態だった。

「リタ、目が覚めた？」

「!!　…先輩!?　一体どういう…」
そう口にはするが、セリカは
インフェスターの手に堕ちたとしか考えようがない。
……だがインフェスターに寄生された人間は理性の無い怪物となるはず
もしかしたらまだ……と言うリタの希望は無情にも打ち砕かれる。
「ふふ、もう大体察しは付いてるでしょ?」
「それでも信じたくないって言うなら…」

セリカに寄生したインフェスターが、構造を変化させ本来の姿に戻る。

「どう？これが今の私の本当の姿」

「綺麗でしょ？ご主人様の身体が私を包み込んでるの…」

その姿は、セリカが既にどうしようもなく手遅れな状態であることを理解するには余りある説得力だった。

「そ、んな……先輩……」

「悲しまなくても大丈夫よ、リタ」
「ご主人様が……あなたも私と同じ僕にしてくれるから♥」
「ひっ……」
リタを拘束する肉の塊や周囲の肉壁から、様々な触手が
リタの身体目掛けて伸ばされる。

「んぉっ　おぉ……っ」
膣、口、耳。身体中の穴を触手が蹂躙する。
得体の知れない体液を身体中に注がれ、頭の中を侵食され
最初に感じた苦痛と嫌悪感も全てが快楽で塗りつぶされていく。
「ふふ、もう気持ちいいでしょ？」
「私の時はそのままご主人様に洗脳して貰ったんだぁ……」
「あはっ、思い出しただけでイっちゃいそう…♥」

「でもね…リタはもっと時間をかけて…
身体の芯から作り変えてくれるんだって」
「うらやましいなぁ…」
セリカの時とは違い、耳穴に挿入された触手は思考には
手を出さずに、快楽をより深く感じられるように神経だけを弄っていく。
さらに催淫効果のある体液により、既にその身体はどうしようもなく
発情し、満たされることのない快楽への欲求ですっかり飢えてしまっていた。

「んんっ♥　おっ　んおぉぉ♥」
「あはははは！もうすっかりイキっぱなしになっちゃったねぇ」
「じゃあ、また後でね…身体が作り変えられる気持ちよさ
たっぷり楽しんで…」
「おおっ♥　おおおぉぉぉっ♥」

数時間後…

「はー…はー…♥　ん…あぁ…♥」
「さて、リタはどんな感じになったかな？」
むせかえるような匂いの漂う空間にセリカが戻ってくる。
何日もの間絶え間なく快楽を与えられ続け、身体を侵食され。
外観に異常はないものの、リタの身体は既に
取り返しのつかない状態まで変質してしまっていた。

「うんうん、すっかり蕩けちゃったねぇ…♥
それに種もちゃんと根付いてるみたいだし…」
空間に充満するインフェスターの匂い、鼓膜を震わすセリカの声や
視界に入るその淫らな身体…。
ありとあらゆるものが性的な刺激へと変換され、子宮が疼き
それだけで軽い絶頂を覚える。
自分の身体が自分のものでは無くなってしまったような感覚が
リタの心に深い絶望をもたらす。
「せ、せんぱ……たすけ……」

「気を失っちゃったみたいですね、ご主人様♥」
セリカは自身の身体と一つになった分体を通し
インフェスターのブレインへと次の指示を仰ぐ。

「…あはっ、いいんですか？　…はい♥」
セリカの紅い瞳が喜色に輝き、リタの胎内に根付いた種が脈動する

「…ふふ、いいよ、リタ……私が助けてあげるからね…♥」